

みんなが気持ちよく

2001年に入所し、今年で8年目を迎える。2年間の受付業務を経て、現在は外回りとして主に債務整理・登記・相続調査等に携わっている。8年目とはいえ、ベテランの域には程遠く、しかしながら、新人を迎え、先輩らしくしなくてはという思いと、初心に帰り心改めようと、身が引き締まる思いである。

私の事務所は弁護士18名、事務局10名と、日々抱える案件も多く、当然ながら多くの人に出会い接する機会がある。

法律事務所職員
西 英子

依頼者

私たちにとっての“お客様”である。しかし、デパートに買い物に来た“お客様”とは違う。法律事務所なんて、そうそう関わりたくないものである。皆悩み悩んだ末に来ているのだ。しかし、その中には、事態が思うようにいかない、嫌な態度の方もいる。つついこちらも感情的になりがちである。本来であれば、お客様には皆平等に接しなくてはならないのに、やはりこちらも相手の態度に左右されてしまう。相手の出方で態度を変えてしまう、そんな自分を恥じた。そうではなく、こちらが親身になって丁寧に接することが、相手の信頼を得、態度を改めることにも繋がるのではないかと思う。分かってはいても難しい。日々訓練である。

相手方

依頼者の数以上に相手方がいる。相手方からの連絡を受けることもしばしば。特に債務整理における債権者の対応には日々追われている。こちらの態度で事件の内容が変わるということにはならないのだろうが、全て喧嘩腰でいるよりも、丁寧な物言いを互いにした方が、気持ちよく仕事が出来るといことによりやく気が付いてきた。

弁護士

大所帯の事務所だけに、弁護士の性格も十人十色。それぞれにあわせた対応が求められる。これもお互い様であるが、依頼の仕方、つまり物は言い様、言い次第でモチベーションは変わるものである。そんなことで仕事が左右されてはいけないし、スピードや仕上がりに差があってはならないが、やはり“人がよい”人は得と言

える。何とかしてあげたいという気持ちになるのである。だから、私も“よい事務局”でありたい。目指すは“頼れる・よい事務局”。

事務員同士

一番接する機会が多いようで、当事務所のように弁護士担当制になっていたりすると、誰が今どのような状況におかれているのか、見えないことも多い。しかし、対弁護士となれば、事務局はチームワークが肝心。忙しくなると、それぞれが自分のことで手一杯になり、気付かずにやり過ごしていることがあるように思う。また簡単なことでも常に面倒な作業があったり、細かなルールがあるが、それを怠ってしまうことも。それは結局、誰かが気が付いてやるしかない。日々回っているように思えることも、誰かが気が付いてやっているからこそスムーズに仕事が回っているのだ。それがたとえ小さな仕事でも。そういうことを一人一人が忘れてしまえば、チームワークは成り立たない。

思いやりの心

一人一人が思いやって心がけること…当たり前のことだが、自分がされて嫌だと思ふ対応をしない、何かを頼むときはやりやすいような下準備、依頼の仕方をする。ストレス社会などと言われているが、ストレスに潰されてしまう人がいる一方で、気が付かずにその原因を作っていることもある。一定の人がいつも負担になる環境ではいけない。

みんなが気持ちよく働く。そのことが依頼者のためにもなっている。そんなことを思いながら働けるのなら本望である。思いやりの心をみんなできたらと思う。